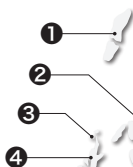


特集 島を元気にする組織・I



5

地域には、多くの共同・協同組織が存在している。自治・生業・生活・地域づくりなど、その目的に合わせて組織され、その規模や取り組み内容はさまざまである。離島では、環海性などの特性から、本土の農山漁村地域と比較してコミュニティの力がより強固といわれ、地道な活動を展開してきている組織も多い。

しかしながら、高度経済成長期における地方から都市への人口移動や少子高齢化など、時代と社会の変遷とともにその役割や活動内容が変化し、再編や縮小、必要な機能のみ分化した組織も少なくなく、都市など外部からのニーズに対応する新たな組織活動が必要とされてもいる。

本誌では、前号まで六回にわたり「島への定住と起業」と題して《個人》の起業や生業づくりを紹介してきた。本号からは、数回にわたり《組織》に焦点を当て、その活動を集めていきたい。島

- ①「暮らす・つなぐ・学ぶ旅」で国内外の交流人口を拡大 …… 22
 対馬グリーン・ブルーツーリズム協会（長崎県対馬市／対馬島）
 同協会事務局長 川口幹子
- ②200人の島で、全国に先駆けた海の体験民泊を展開 …… 30
 青島体験振興会（長崎県松浦市／青島）
 本誌編集部
- ③観光客それぞれに合う《島らしさ》を提供 …… 36
 NPO法人 おぢかアイランドツーリズム協会（長崎県小値賀町／小値賀諸島）
 小値賀町地域おこし企業人 長谷川雄生
- ④個人客に特化し、「田舎の親戚宅」を思わせる体験事業 …… 42
 五島列島B&B（長崎県新上五島町／若松島・中通島）
 ライター 竹内 章
- ⑤あたり前を《特別》に変える「民泊」「ホームビジット」「島の学校」… 50
 一般社団法人 久米島町観光協会（沖縄県久米島町／久米島）
 同協会 小田部早苗



を元気にする」ためにさまざまな事業に取り組んでいる組織の現状、設立から今日にいたる経緯、将来展望や課題などを多角的に検討することで、今後の離島振興施策のヒントが得られるかもしれない。

今回は、農林漁業体験民宿（農山漁村余暇法）と簡易宿所営業（旅館業法）による《体験民泊》に取り組み組織を紹介する。団体から個人へ、《もの》から《こと》への着目といった観光ニーズの多様化を背景に、各地域では、自然環境や伝統文化、住民の生業やありのままの暮らしを観光資源として捉え直すうごきが進んでいる。そのなかで体験民泊は、子どもたちへの教育効果をもたらし、国内外との交流促進につながる取り組みとして、着地型観光の一つの柱としても注目されている。なかには、平成一六年度から観光協会に民家体験泊部会を立ち上げて本格的に事業を開始し、現在では年間五万人もの修学旅行生を集めるまでになった沖縄県伊江村など、体験民泊を島の一大産業にまで昇華させた事例もある。

今号は、地域が一丸となって事業に取り組む長崎県の対馬市、松浦市青島、小値賀町、新上五島町、そして沖縄県久米島町の取り組みを報告する。

対馬グリーン・ブルーツーリズム協会

「暮らす・つなぐ・学ぶ旅」で 国内外の交流人口を拡大

対馬グリーン・ブルーツーリズム協会事務局長 川口 幹子

農家・漁家民宿を会員とする組織

グリーンツーリズムとは、農山漁村に滞在し、農家民宿に宿泊しながら収穫体験をしたり、農家が営むレストランで郷土料理を堪能したり、その土地の風土や文化、暮らしそのものを楽しむ旅のスタイルのことである。対馬では、このグリーンツーリズムの推進による交流人口の拡大を目的として、平成一七年一二月に「対馬グリーン・ブルーツーリズム協会」が設立された。島内にある農家・漁家民宿（※註）の営業許可取得者が主な会員で、当初は「つしま・緑と青の体験の宿」として六軒でスタートした。

協会設立の立役者となったのは、野鳥の専門家であり、対馬の自然や文化に魅せられて移住した柚木修氏。彼は、「島まるごと暮らし博物館」の構想を掲げ、農家・漁家民

宿に宿泊しながら、郷土料理や釣り体験、シイタケ狩りなどの産業体験を行う、現在の対馬のグリーンツーリズムのベースを構築した。

ところが平成二一年度、柚木氏の急逝により、協会は事務局機能と牽引役を失ってしまった。そのため、グリーンツーリズムの推進を担っていた市の農林水産部では、厚生労働省の「緊急雇用対策事業」を活用して事務員を雇用、配置する措置をとって対応することとなった。同二二―二四年度までの三年間、この体制は継続したが、そもそも緊急雇用対策なので事務員は最長で一年しか雇用できない。グリーンツーリズムの考え方や推進体制を学ぶため、先進地へ視察に行ったり、研修会などに参加したりするもの、それを活かす前に雇用期間が切れてしまい、継続した体制づくりができないことが課題となっていた。



対馬島：福岡市から壱岐島を経て147kmにある国境の島。平成16年、島内6町が合併し対馬市に。市全体の面積704.59km²、人口31,039人（平成30年11月末現在）。朝鮮半島まで約50kmと近く、古来、大陸との文化や経済の交流の窓口となってきた。固有種や大陸系の動植物も多い。

※註…対馬の農家・漁家民宿は、旅館業法上の「簡易宿所営業」許可を取得している。農山漁村の滞在型観光のための基盤整備として、農林漁業者が自宅を利用して宿泊サービスを提供できるように、旅館業法が規制緩和されており、平成三〇年六月に施行された住宅宿泊事業法（空き家や空き部屋の活用）とは異なる。これまで対馬グリーン・ブルーツーリズム協会では「民泊」という言葉を使っていたが、住宅宿泊事業法に基づく民泊との混同を避けるため、ここでは農家・漁家民宿という名称を使用する。

二年を要した協会事務局の民営化

筆者は当初、対馬グリーン・ブルーツーリズム協会の総会にオブザーバーとして参加したり、意見交換会や県からの委託事業でモニターツアーを実施したりして、同協会との関わりを持っていた。当時、市でグリーンツーリズム推進を担当していた日高勝也さんが、協会の事務局をこのまま市が主導するのではなく、「川口さんに任せてみたらどうか」と考え、バックアップしてくれたのが、事務局の民営化の発端である。

それから民営化に向けての体制づくりが始まった。まずは、島内各所に存在している農家・漁家民宿の現状把握のため、客室の間取りや宿泊定員、設備などの基礎情報、提供可能な体験プログラムなどを調査した。さらに、事務局の民営化に対する意識調査も実施。価格を統一することは是非やその場合の金額、これまで各民泊についている固定客の扱い、事務局そのものの機能などについて、一軒一軒

訪問し、意見を収集した。

一般的にグリーンツーリズム推進団体は、設立当初から事務局主導でプログラムづくりやプロモーション活動を行っているところが多い。しかし、対馬は事務局が後発である。これまでは、各農家・漁家民宿が個別に価格を設定し、独自のプロモーション活動を行っていた。当然、「対馬グリーン・ブルーツーリズム」という形のプロモーションではない。営業形態も個々に確立されており、例えば、すでに韓国需要の増加に



受け入れ農家の方の指導のもと農業体験をする高校生。

に対応していた北部地域の会員の場合、事務局に窓口を一本化し広報を集約することのメリットはあまりなく、むしろ事務局手数料を上乗せする形の統一価格など、デメリットの方が大きかった。それ以外でも、すでに固定客が多い宿ほど「自分たちの頑張りでお客さんをつけてきた」という意識が強く、統一窓口の設置はその努力をな

いがしろにする行為のようにも思えた。

ベテラン会員さんの尽力を尊重しつつ、対馬のグリーンツーリズムとして次の展開に踏み出すためには、どのような事務局体制が望ましいのか……。この体制の構築に二年を要したが、最終的には、しばらくの間、事務局が斡旋するパターンと個別に申し込むパターンとで対応を分けるかたちで運用し、状況を把握してから再度検討するというこ
とで、平成二八年一月、事務局の民営化が承認され、筆者が事務局長を務めることとなった。

喧々諤々の議論の末に事務局を任せてもらった手前、「事務局が変わった途端お客さんが来なくなった」では話にならない。何をするにも先立つものが Needed が、幸いなことにこの活動に適当な農林水産省の「農山漁村振興交付金」を活用することができた。これには、申請書類の作成や関係各所との調整などをともにし、現在も協会運営を牽引してくださっている市の内山直子さんの存在が大きかった。

この交付金により、平成二八年度から三年間（初年度は「都市農村共生・対流及び地域活性化対策事業」、翌年度から二年間は「農泊推進対策事業」として）の活動費用や事務局スタッフの人員費を確保できた。

島の特徴を活かした観光商品の開発

活動を本格化させるにあたり、まず対馬のグリーンツーリズムのコンセプトを固め、商品づくりの基礎をつくるこ

とから始めた。国境の離島である対馬は、その地理的条件から、歴史的に大陸と日本をつなぐ架け橋の役目を果たしてきた。対馬を経由して大陸から本土へもたらされたさまざまな技術や文化のルーツが、島の暮らしのなかに今も変わらず残っている。こうした対馬の特徴を活かした観光商品づくりを考えていった。

そこで「対馬を暮らす旅」「国境をつなぐ旅」「原点を学ぶ旅」の三つの柱（コンセプト）を設定することにした。

「対馬を暮らす旅」では、各季節の対馬の旬な体験を月別にして、テーマを持たせたモデルコースを作成した。例えば、一二月は縄文時代から続くもともと同様に近い「対州そば」の「新蕎麦手打ち体験コース」、一月は対馬独特の正月の郷土料理を楽しむ「島の正月体験コース」、二月は旬の寒ブリを食べつくす「寒ブリ堪能コース」といった具合である。そして、旅行会社にな各コースでのツアー造成をお願いし、募集型企画ツアーを実施している（※註）。

「国境をつなぐ旅」では、国境の島だからこそ体験できる国際交流を取り入れた観光商品の開発に力を注いだ。九州大学のボーダーツーリズムの研究グループと連携し、親子で国境を越える旅を企画したり、対馬の海洋環境保全団体との共同で日韓合同の漂着ゴミ清掃ボランティアツアーなどを実施している。

「原点を学ぶ旅」では、大陸との橋渡し役を果たしてきた対馬の歴史・自然・文化を教育資源として活用しようと、

主に大学生の誘致に向け、農家・漁家民宿を活用した実習内容の提案を行った。現在では、九州大学や筑紫女学園大学など九州にある大学をはじめ、立教大学など関東の大学もゼミの実習などで使ったり、インターンとして学生を派遣してくれている。

現在、農家・漁家民宿では、これらのツアー以外にも、「原木シイタケ栽培体験（収穫・植菌など）」「和蜜」採蜜体験」など、二〇ちかくの対馬ならではの体験プログラムを提供している。

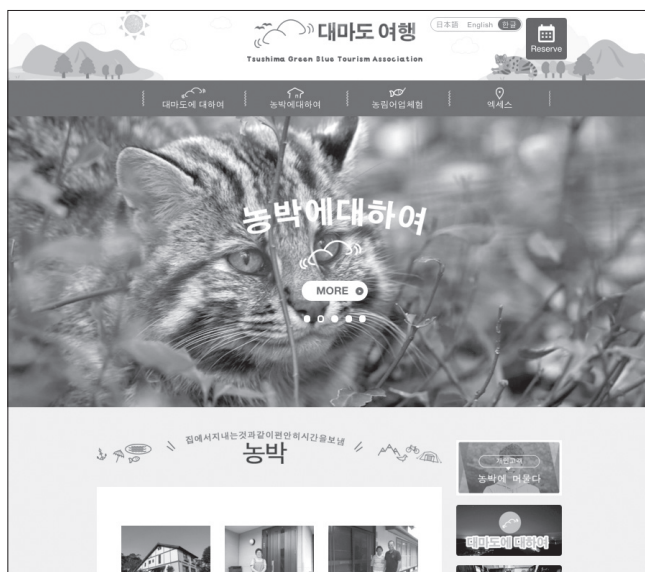
一般のお客さんは中高年が多いのだが、何よりもまず食事の美味しさ、そしてそれらが対馬で生産されたものであることに驚く。調理方法や生産方法などの情報交換で会話が弾み、その後、産品を送り合う関係になることも多い。

学生は総じて「第二の実家のようだ」「帰りたくない」と言う。実際、実習できた学生は卒業旅行でもう一度対馬を訪れる割合が非常に高い。大学の教員からも、都会の学生にとっては対馬の暮らしは衝撃的で非常に良い教材であるし、コミュニケーションの勉強にもなる、と好評をいただいている。

※註・宿泊や運輸サービスがセットになった旅行商品の販売を行うには、旅行業の登録が必要である。登録には、基準資産や保証金の供託が必要で、地方企業にはハードルが高かった。しかし近年、より地域密着型で旅行商品の開発ができるよう、範囲が限定される代わり資金面でのハードルが低い「地域限定旅行業」が新設された。

多言語に対応した情報発信

また、着地型観光商品をプロモーションする基盤として、ホームページのリニューアルを行った。個々の農家・漁家民宿の顔が見えるように、どんな食事が出るのか、どのような体験ができるのか、客室の雰囲気や施設の状態、受け



協会HPは日本語・英語・韓国語に対応。

入れてくれる農家さん・漁師さんの思いなどの情報を集めた。この「ネタ」の収集のため、スタッフはすべての農家・漁家民宿に宿泊し、自らの体験を記事にした。HPでは、日本語のみならず英語、韓国語でも情報を発信。さらに、そこからダイレクトに予約もできるような工夫をした。

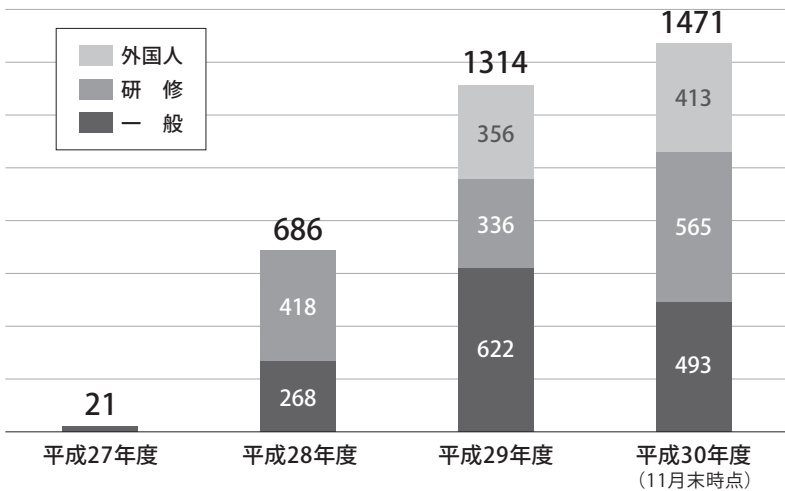
このほか会員さんの意識向上やスキルアップのための研修も行っている。衛生管理講習を毎年開催しているほか、安全管理・伝える技術・韓国の文化や風習・おもてなし・旅行のトレンドなど、さまざまなテーマの研修を企画。会員の方々を引き連れた先進地視察も毎年実施している。

事務局の民営化から三年、会員の農家・漁家民宿は三一軒（平成三〇年一月現在）まで増え、宿泊者数も順調に増加している。これには多言語対応の結果、韓国からの個人客の需要を取り込めるようになったことが大きく、外国人宿泊者数に占める韓国人は九割に達する。最近では、欧米からの問い合わせも増えている。

また、宿泊者の三分の一以上は大学生の研修利用であり、学生の実習誘致についてもある程度成果が出てきたのではないかと感じている。

協会会員の方々からは、外国人や学生の受け入れに關して「間に事務局が入ってくれるので安心だ」という声をいただく。もちろん、まだまだ体制が十分ではなく、お叱りをいただくこともたびたびだが、事務局への期待の表れと受け止め、これに応えられるように努めていきたい。

農家・漁家民宿 宿泊者数（事務局幹旋分）





地区にある神社の草むしりを手伝う子どもたち（夏休み子ども農山漁村体験合宿 島の達人入門塾）。

自ら着地型観光商品を企画・販売できる体制づくりを

昨年四月、筆者は、対馬グリーン・ブルーツーリズム協会の事務局法人として「一般社団法人対馬里山繋ぎ^{けいぎいじやく}塾」を設立した。協会自体は任意団体のため旅行業登録を持たず、独自に着地型観光商品の販売ができない。これまでは旅行会社に販売を委託していたが、法人の設立を契機に、旅行業登録をして、自前で販売できる体制に踏み切りたい。

繋ぎ塾という名称には、対馬の人々が脈々と受け継いできた山・里・海の営みを後世へと繋いでいく、という思いが込められている。自然の仕組みを熟知し、そこから恵み

をいただく術、その中で育まれてきた共生の知恵をしつかりと後世に伝えたい。

今年度、夏休み期間に都会の子どもたちに農山漁業体験をしてもらおうと、農家・漁家民宿に滞在する「夏休み子ども農山漁村体験合宿 島の達人入門塾」を実施した。海・里・山すべての体験が一軒の民宿でできるという対馬の特徴と、島のお父さんお母さんのホスピタリティーのおかげで、子どもたちの目が輝く非常に良いプログラムとなった。大陸との交流の歴史をベースとした平和学習、ツシマヤマネコの保全を柱とした環境教育、そして農家・漁家民泊での文化体験など、対馬は教育資源で溢れている。今後は、修学旅行をはじめとした教育旅行の誘致にも取り組み、多くの子どもたちに、対馬で学んでももらいたいと考えている。

対馬で暮らす多くの方々は、山も里も海も周りの自然すべてを活かす技術と知恵を持っている。まさに、何でもできる達人たちだ。また、歴史的に交流が盛んな島だったからか、他者を排除せずに、出会った人を一瞬で家族のようにしてしまう懐の深さも持っている。対馬が誇るべきこれらの技術や知恵、人情という「資源」を、観光そして教育に活かしていくことが対馬グリーン・ブルーツーリズム協会の使命であると感じている。

筆者と対馬グリーン・ブルーツーリズム協会との出会い

●衝撃を受けた農家民宿体験

私が対馬に移住したのは平成二三年。対馬市島おこし協働隊（地域おこし協力隊）として着任した。当時の私は、グリーンツーリズムという言葉や島にその推進組織があることすら知らなかった。協働隊として私に与えられたミッションは「生物多様性保全」で、ツシマヤマネコをはじめとする対馬独特の貴重な生物の保全につながる地域活動の推進だった。そこで初年度は、ヤマネコの保全に関して島内で誰が、何をしているのかを把握し、その方々とのつながりづくりを努めた。ヤマネコの生息には、水田や畑地、伐採され更新される雑木林など里山の環境が重要である。そして私は、その環境をつくり出しているのは、縄文時代から続くソバの栽培、弥生時代初期にはすでに始まっていた水稻栽培、長い間島の主要産業だった製炭業、そして「品質日本一」を自負する原木シイタケ栽培など、対馬の人々の「営み」の歴史であることに気づいた。この過程で、グリーンツーリズムの一環としてヤマネコ探索を行っている農家民宿を知り、ちょうど青森（実家）から来島していた母とともにそこに宿泊しようとしたのが、私と対馬グリーン・ブルーツーリズム協会との邂逅である。結局、その農家民宿はすでに休業していたため、現在も営業している「民泊あびる」に泊まることとなった。

人生初の農家民宿体験は衝撃的だった。食卓に並ぶふんだんな海の幸すべてが、ご主人・阿比留恭孝さんが目の前にある海から獲ってきたものであること、自家製のご飯がとても香り高くて甘かったことなど……。しかし何よりの衝撃は、奥さんののり子さん（会員登録上の宿主）が初対面の私に、旧知の仲であるかのように、農家民宿を営業していく上での夢を語ってくれたことだ。当時の協会が事務局不在の状態で、牽引者がいないという悩みも打ち明けられた。私が対馬に来た経緯や島でやりたいことを話すと、「あなたみたいな人が事務局を担ってくれたらいいのに」と言ってくれた。この言葉は、のちに私が活動の中心をグリーンツーリズムに移していく原動力となった。その晩、阿比留さんとのグリーンツーリズム談義は、日付が変わるまで続いた。

学生時代の友人が訪ねて来たときには、農家民宿「神宮自然農園」を利用した。ここでは、飼っている鶏を捌くところから、対馬の郷土料理である「いりやき」をつくる。中に入るソバも、打つところから始める。これまで知識として持っていたヤマネコと島の暮らしの関係を、実体験として理解できた瞬間だった。

●研修参加者の心をつかんだ農家・漁家民宿

対馬に赴任して二年目、私は、生物多様性保全のためには、



平成25年度に開催された島おこし実践塾の参加者たち。

まず島の暮らしと生物多様性との関係を知ってもらう機会をつくる必要だと考えた。そこで、里山の生物多様性保全と地域振興との関係を学ぶ「島おこし実践塾」、周囲の自然資源を活かす島の暮らしを体験する「島暮らし体験ツアー」、自然再生学会と協働で耕作放棄地の再生技術を学ぶ「田んぼ再生研修」などを実施した。

稲作がいかに多様な生き物を育むのかを学んだあと、放棄

された水田を再生する。建築家と一緒に風土と調和するように設計された古民家の構造を見聞きしたあと、古民家の抜け落ちた床の張り替え作業を行う。伝統的な養蜂形態を保っている島の養蜂家の指導を受けながら、ニホンミツバチの採蜜を体験する。漁師から水産資源の減少や保護のための取り組みなどの話を聞いたあと、漁船に乗って漁業の現場を見る。企画立案者として考えに考え抜いた内容と講師陣だったが、参加者アンケートでもっとも高評価を得たのは、ほかでもない農家・漁家民宿だった。

研修の実施にあたって現場にホテルや旅館がないため、いわば次善策として農家・漁家民宿を活用したのだが、どんなプログラムよりも、参加者の心をつかんだのである。私は、農家・漁家民宿の持つ教育力こそが、対馬の人々の営みを継承し、結果的にヤマネコなどの保全も実現する宝刀だと確信し、これまでに以上にグリーンツーリズムの推進に取り組んでいくことになった。



川口幹子（かわぐち もとこ）

対馬グリーン・ブルーツーリズム協会事務局長／一般社団法人対馬里山繋ぎ塾代表理事。1979年青森県生まれ。2011年、対馬市島おこし協働隊生物多様性保全担当として対馬に移住。都市農村交流促進や農林漁業体験を通じた観光・教育事業を展開している。